

令和8年度 沖縄群島 病害虫発生予報 第7号（10月予報）

○向こう1か月の天候の見通し（令和8年9月24日発表：沖縄気象台）

平均気温	降水量	日照時間
高い	平年並か少ない	平年並か多い

○10月の発生予報（沖縄群島）

作物	病害虫名		調査結果	予報		予報の根拠
			9月の発生量 （平年比）	9月からの 増減	10月の発生量 （平年比）	
カンシヨ	①	イモキバガ	並	↘	並	平年の発生量の推移（↘）
	②	ナカジロシタバ	並	→	並	平年の発生量の推移（→）
	③	エビガラスズメ	やや多	→	やや多	平年の発生量の推移（→）
さとうきび	①	メイチュウ類 （カンシャシンクイハマキ・イネヨトウ） （夏植え）	並	→	並	平年の発生量の推移（→）
（温州みかん）	①	そうか病	並	→	並	平年の発生量の推移（→）
（タカンカ）	①	かいよう病	並	↗	並	平年の発生量の推移（↗）
	②	黒点病	並	↗	並	平年の発生量の推移（↗）
マンゴー	①	チャノキイロアザミウマ	並	↗	並	平年の発生量の推移（↗）
	②	マンゴーハフクレタマバエ	やや多	↗	やや多	例年の発生量の推移（↗）
	③	ハダニ類	やや多	↗	並	平年の発生量の推移（↗）

※発生量は、ほ場調査の結果の平年値または例年値の同月比。

- 平年値：過去5～10年間の発生量の平均値
- 例年値：過去3～4年間の発生量の平均値

※（発生なし）は、今回の調査中に観察することができなかった病害虫。

※増減傾向は、発生量（現況）と比較した翌月の増減を予測している。



沖縄県病害虫防除技術センターのホームページにて、発生予報の詳細内容やその他情報を掲載しています。

○10月の発生予報つき（沖縄群島）

作物	病害虫名		調査結果	予報		予報の根拠
			9月の発生量 (平年比)	9月からの 増減	10月の発生量 (平年比)	
小 ギ ク (一 年 未 出 荷 用)	①	黒斑・褐斑病	多	↓	多	平年の発生量の推移(↓) -----
	②	アザミウマ類	やや多	↑	やや多	平年の発生量の推移(↑) -----
	③	アブラムシ類	並	↑	並	平年の発生量の推移(↑) -----
	④	チョウ目幼虫	並	↓	並	平年の発生量の推移(↓) -----
	⑤	カスミカメ類	並	↓	並	平年の発生量の推移(↓) -----
	⑥	ハダニ類	並	↑	並	平年の発生量の推移(↑) -----

※発生量は、ほ場調査の結果の平年値または例年値の同月比。

●平年値：過去5～10年間の発生量の平均値

●例年値：過去3～4年間の発生量の平均値

※（発生なし）は、今回の調査中に観察することができなかった病害虫。

※増減傾向は、発生量（現況）と比較した翌月の増減を予測している。



沖縄県病害虫防除技術センターの
ホームページにて、発生予察の詳細
内容やその他情報を掲載しています。

○その他注意すべき病害虫（沖縄群島）

作物	病害虫名	発生状況及び防除事項
カ ン シ ヨ	トリバ類	一部のほ場で発生が見られた。幼虫が葉を食害する。発生初期の防除が有効であるので被害葉が出はじめたら、早期防除に努める。また、収穫時に刈り取った茎や屑イモ等の収穫残さは発生源となるためほ場外へ持ち出す。
	シロイチモジヨトウ	一部のほ場で発生が見られた。幼虫が葉を食害する。老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、若齢期の防除が重要である。
さ と う き び	黒穂病	一部新植夏植えほ場で確認された。発病株からの孢子飛散を防ぐためにビニール等で袋かけして抜き取り、処分する。新植への感染を防ぐために発病ほ場やその隣接地からの採苗は控える。
	バッタ類	久米島で発生が多くなっている（防除員報告）。タイワンツチイナゴは、年1回の発生で幼虫は4～6月に、成虫は6～8月にかけて出現する。トノサマバッタは、年3～4世代発生する。ほ場周辺のイネ科雑草は、若齢幼虫の好適な餌となるので除去に努める。防除は幼虫期の実施が効果的なので、ほ場及び周辺の見回りを行い幼虫の早期発見に努める。成虫防除を実施する場合には、活動の鈍い早朝に一斉防除を行うと効果的である。

○その他注意すべき病虫害つづき（沖縄群島）

作物	病虫害名	発生状況及び防除事項
マンゴー	炭疽病・軸腐病・すす点病	せん定枝や残さは伝染源となるので、施設外へ持ち出し処分する。
	チョウ目幼虫	一部施設でナカジロフサヤガの発生が見られた。 新葉を食害するので、施設内を見回り不要な新梢を除去するとともに早期発見・防除に努める。
	カイガラムシ類	一部施設でコナカイガラムシ類の発生がみられた。 カイガラムシ類は一般的に成虫の薬剤感受性が低いことから、幼虫に対して薬剤防除を行う。またハブラシ等で成幼虫をこすり落とすことも密度低減に有効である。 多発すると防除が困難になるため早期発見・防除に努める。

令和8年度 宮古群島 病害虫発生予報 第7号（10月予報）

○向こう1か月の天候の見通し（令和8年9月24日発表：沖縄气象台）

平均気温	降水量	日照時間
高い	平年並か少ない	平年並か多い

○10月の発生予報（宮古群島）

作物	病害虫名		調査結果	予報		予報の根拠
			9月の発生量 （平年比）	9月からの 増減	10月の発生量 （平年比）	
さとうきび	①	メイチュウ類 （カンシャシクイハマキ・イネヨトウ） （夏植え）	並	→	並	平年の発生量の推移（→）
マンゴー	①	チャノキロアザミウマ	並	↘	並	平年の発生量の推移（↘）
	②	マンゴーハフクレタマバエ	並	↗	並	平年の発生量の推移（↗）
	③	ハダニ類	多	→	多	平年の発生量の推移（→）

※発生量は、ほ場調査の結果の平年値または例年値の同月比。

- 平年値：過去5～10年間の発生量の平均値
- 例年値：過去3～4年間の発生量の平均値

※（発生なし）は、今回の調査中に観察することができなかった病害虫。

※増減傾向は、発生量（現況）と比較した翌月の増減を予測している。



沖縄県病害虫防除技術センターのホームページにて、発生予報の詳細内容やその他情報を掲載しています。

○その他注意すべき病害虫（宮古群島）

作物	病害虫名	発生状況及び防除事項
さとうきび	黒穂病	一部新植夏植えほ場で確認された。胞子飛散を防ぐために発病株は早めに抜き取り、袋に入れてほ場から持ち出して処分する。新植への感染を防ぐために発病ほ場やその隣接地からの採苗は控える。
マンゴー	炭疽病・軸腐病・すす点病	せん定枝や残さは伝染源となるので、施設外へ持ち出し処分する。
	チョウ目幼虫	一部施設でコシロモンドクガ、ナカジロフサヤガの発生が見られた。新葉を食害するので、施設内を見回り、不要な新梢を除去するとともに、早期発見・防除に努める。
	カイガラムシ類	一部施設でコナカイガラムシ類の発生がみられた。カイガラムシ類は、一般的に成虫の薬剤感受性が低いことから、幼虫に対して薬剤防除を行う。また、ハブラシ等で成幼虫をこすり落とすことも、密度低減に有効である。多発すると防除が困難になるため、早期発見・防除に努める。

令和8年度 八重山群島 病害虫発生予報 第7号（10月予報）

○向こう1か月の天候の見通し（令和8年9月24日発表：沖縄気象台）

平均気温	降水量	日照時間
高い	平年並か少ない	平年並か多い

○10月の発生予報（八重山群島）

作物	病害虫名		調査結果	予報		予報の根拠
			9月の発生量 （平年比）	9月からの 増減	10月の発生量 （平年比）	
水 稲 （ 2 期 ）	①	葉いもち病	並	↗	並	平年の発生量の推移（↗） -----
	②	セジロウンカ	多	↘	多	平年の発生量の推移（↘） -----
	③	ツマグロヨコバイ	やや多	↗	やや多	平年の発生量の推移（↗） -----
	④	斑点米カメムシ類	やや多	↗	並	平年の発生量の推移（↗） -----
	⑤	コブノメイガ	並	↗	並	平年の発生量の推移（↗） -----
	⑥	スクミリングガイ	並	↘	並	平年の発生量の推移（↘） -----
さ と う き び	①	メイチュウ類 （カンシャシクイハマ キ・イネヨトウ） （夏植え）	並	→	並	平年の発生量の推移（→） -----
マ ン ゴ ー	①	チャノキイロアザミウマ	やや少	↗	並	平年の発生量の推移（↗） -----
	②	マンゴーハフクレタマバエ	やや多	→	やや多	平年の発生量の推移（→） -----
	③	ハダニ類	多	↗	多	平年の発生量の推移（↗） -----

※発生量は、ほ場調査の結果の平年値または例年値の同月比。

●平年値：過去5～10年間の発生量の平均値

●例年値：過去3～4年間の発生量の平均値

※（発生なし）は、今回の調査中に観察することができなかった病害虫。

※増減傾向は、発生量（現況）と比較した翌月の増減を予測している。



沖縄県病害虫防除技術センターの
ホームページにて、発生予察の詳細
内容やその他情報を掲載しています。

○10月の発生予報つき（八重山群島）

作物	病害虫名		調査結果	予報		予報の根拠
			9月の発生量 (平年比)	9月からの 増減	10月の発生量 (平年比)	
オクラ	①	うどんこ病	並	↗	並	平年の発生量の推移（↗） -----
	②	アブラムシ類	並	↗	並	平年の発生量の推移（↗） -----
	③	フタテンミドリヒメヨコバイ	並	↘	並	平年の発生量の推移（↘） -----
	④	チョウ目幼虫	並	↘	並	平年の発生量の推移（↘） -----

※発生量は、ほ場調査の結果の平年値または例年値の同月比。

- 平年値：過去5～10年間の発生量の平均値
- 例年値：過去3～4年間の発生量の平均値

※（発生なし）は、今回の調査中に観察することができなかった病害虫。

※増減傾向は、発生量（現況）と比較した翌月の増減を予測している。



沖縄県病害虫防除技術センターのホームページにて、発生予察の詳細内容やその他情報を掲載しています。

○その他注意すべき病害虫（八重山群島）

作物	病害虫名	発生状況及び防除事項
水稻	トビイロウンカ	前作で本種による坪枯れが見られた地域では、発生が見られたら速やかに薬剤散布を行う。散布時は薬剤抵抗性を考慮して薬剤を選定し、本種の寄生が多い株元に薬剤が十分付着するよう丁寧に行う。
マンゴー	炭疽病・軸腐病・すす点病	せん定枝や残さは伝染源となるので、施設外へ持ち出し処分する。
	チョウ目幼虫	複数の施設でナカジロフサヤガの発生が見られた。 新葉を食害するので、施設内を見回り、不要な新梢を除去するとともに、早期発見・防除に努める。
	カイガラムシ類	一部施設でコナカイガラムシ類の発生が見られた。カイガラムシ類は、一般的に成虫の薬剤感受性が低いことから、幼虫に対して薬剤防除を行う。またハブラシ等で成幼虫をこすり落とすことも、密度低減に有効である。多発すると防除が困難になるため、早期発見・防除に努める。
オクラ	葉すす病	一部ほ場で発生が確認された。不要な下葉を除去するとともに、発生確認時及び台風・大雨の前後には登録農薬を散布する。
	ミナミアオカメムシ	一部ほ場で発生が確認された。成、幼虫が果実や蕾を吸汁加害する。外観からは被害がわかりにくい。果実を切断すると種子の変色や吸汁部の褐変が見られる。また果実基部が吸汁されると内部がスポンジ状になる。発生源となるほ場周辺のイネ科雑草を除去し、登録農薬を散布する。
	クロテンコナカイガラムシ	一部ほ場で発生が確認された。発生を確認したら速やかに寄生部位を除去し、ほ場外に持ち出し処分する。寄主植物が多いので、雑草防除に努めるとともに、周辺の作物や樹木等での発生に留意する。
	カタツムリ類	複数のほ場で発生が確認された。葉を中心に茎、花蕾、果実も食害する。登録農薬のうちベイト剤は使用方法に留意し作物にかからないようほ場周辺に処理する。茎葉に移動したカタツムリ類は捕殺に努める。